小さな学校の大きな力・・・初山小健闘
交通安全子供自転車全国大会

【観戦記】東京雪州会会長　牧山康敏

壱岐市の小さな学校が全国大会の晴れ舞台で大きな力を発揮した。

交通道徳を守り自転車を如何に安全に乗るかを競う第47回交通安全子供自転車全国大会が去る1日、東京ビッグサイト（国際展示場）で開かれ、長崎県代表として出場した壱岐市立初山小学校の選手（4人）が善戦健闘した。

団体・個人とも上位入賞は果たせなかったが、全国大会での活躍振りは母校はもちろん壱岐市の小学生や地域の人々にとって大きな励みとなろう。

この大会は全日本交通安全協会と警察庁が主催し、内閣府、文部科学省、全国連合小学校長会などの後援で昭和41年から毎年開催。47都道府県代表が参加し、初山小は平成2年、3年、6年に次いで今回が18年ぶり4回目の県代表出場となる。

同小学校はこの子供自転車競技では壱岐で敵なしの伝統強豪校だが、全校生徒数わずか38人の小規模学校。8月下旬の県大会で22校の頂点に立ち、全国出場を果たした。選手を引率してきた江浪俊彦校長は「今回の県代表は予想外だったが、選手は朝の授業前に学科を勉強し放課後に実技の練習と土日曜を返上しての努力の成果です」と選手の努力をねぎらい、さらにPTA関係者や地域の人々の献身的な応援に感謝の念を込めた。

同校では「目標に向かって頑張り抜く子供」をスローガンにしており、今回はそれを実践してみせた形だ。選手に夫婦で同行した同校のPTA会長の山内弘美さんは「選手はそれぞれ全力を出した。この経験は必ず彼らの将来に役立つでしょう」と選手を激励。チームの主将を務める息子さんの崇弘君はアンカーとして最後に登場した。

競技は選手4人が一人ずつ北海道から順番に、会場内に設けられたコースに沿って自転車を走らせるものだが、障害物や信号などをクリアし、幅の狭い2つのサークルを回るなどかなり難度の運転技術を要する。これを見事にクリアする選手も多く全国大会のレベルの高さを実感した。初山チームは村部菜月（5年）、長岡みのり（同）、田中望羽（6年）、山内崇弘（同）君の順に4選手が競技（他に2人が補欠）。競技開始前には学科試験も同会場で行われ、成績に加味される。競技を終えた初山小選手は整列して応援の人達に挨拶。礼儀正しさも一級品だ。

当日は選手の保護者ら中心に選手、指導員を含め壱岐から17人が同行。また関東初山会の浦瀬博之（元会長）、山口義行（同）、長嶋文満現副会長、土谷厚巳氏らが早くから会場に駆けつけ競技終了まで母校の生徒の健闘に声援を送った。

初山小選手の皆さん、東京の大舞台での体験を踏まえて更に鍛錬を怠らず、全国制覇の高い目標に向かって前進してください。小さな学校の、ドでかい夢の実現を期待したいものです。

フレーフレー　初山小学校！

競技中の初山小主将・山内崇弘くん

健闘した初山小選手

《壱岐新報川柳》壱岐川柳会
6月　兼題「雑詠」

江川　漣　選

ヨットマン　レースに賭ける太き腕　仙京
部屋中に頑張った証　いざ入試　洋子
一粒の米に昭和と今がある　ふみこ
海女の町うにめし盛って壱岐自慢　伸幸
白鳥の気だるさ分かる世の不信　ゆたか
野あざみの揺れて泡吹く水蛍　星舟
堅物の眉を動かす春の風　甫釧
野の花の愛　恋ねだる訳もなく　緋呂子
夕凪の川面に蛍夢を舞う　久恵
姉の漬物亡母そっくりの味を継ぐ　幸子

長い長い手紙を書けり梅雨半ば　伸吾
ひとの手の温もり風も柔らかい　華子
店閉めて話が尽きぬ馴染み客　ゆたか
言い訳を零して薔薇は地に溢れ　篤世
次に逢う約束はせぬうしろ影　星舟
流星や多情多恨の無に帰る　ゆたか
復興祈り震災がれき受け入れず　健人
梅雨寒むの女ひとりの髪の冷え　伸吾
愛の雨受け手紫陽花色冴える　久恵
佳　息子に託す稲田見渡す老いの笑み　絹代
佳　残り香も愛し枕を抱いて寝る　海秀
人　被災地の明日を耕す鍬を持つ　健人
地　友が逝き師も逝き雨も降り止まず　華子
天　仏壇の菓子入れかえる梅雨半ば　扶巳
軸吟　愚痴も無く感動も無く妻と居る

ありがとう！海からのおくりもの
島っ子ワークショップ報告記

主催　濱児童絵画教室・壱岐の島自然創作講座
濱　英二・濱　裕子

7月28日（土曜）午前、芦辺の清石浜で第一回目の夏休み創作講座・「海からのおくりもの」を開催しました。

朝方の雷に心配をしましたが、晴れ渡り、海もまばゆいマリンブルーに輝いています。

屋根つきの休憩場所の横にテントを張り、荷物をおいて創作準備。

「おはようございます」

幼稚園の年少さんから小学生まで23名と、お父さんお母さんご家族皆さん（計40名）元気な顔が勢ぞろい。前日よりカレーの仕込みをして下さったお母さん方にお礼をのべて、段ボールを敷き詰めたスペースに集合、出席。

「今日は海からの贈り物で、夢の島と平和灯台を作ります」

自分で見つけたもので作るんだねと頷きながら、子ども達の眼がきらり輝き始めました。台板に紙やすりをかけて材料も揃えます。

斑ごとにバケツを下げてさっそく浜へ。お日様が熱く照らす砂浜から波打ち際を歩いて、白い貝がら、模様入りの小石、木ぎれに、黄色いカニまで発見。

さあ、いよいよ制作。「どんな灯台にしようかな」あれこれ思案しながら台板にのせて、わいわい。お父さん方もそっと見守り、フォロー。汗をかきかき子ども達の手元から、作品が次々に誕生していきました。

「できたよ！」「かんせいした！」

全員で作品を持って清石浜の青い海をバックに記念撮影。（写真参照）

平和をねがう灯台が小さな光を放っていくようでした。

今回、壱岐の島の自然素材を自分で探して手作り創作をする夏休みのワークショップは、好評のうちに事故やけがもなく無事に開催できました。自然のなかで創作できる喜びに心から感謝です。

平和をねがう子ども達の創造性をこれからも応援したいと思います。

清石浜の警備管理担当皆さんにもお世話になりました。

ありがとうございました。

第25回サマーキャンプ
このゆびとまれを開催して

壱岐島リハビリテーション研究会
会長　小金丸敬仁

7月28日に壱岐島リハビリテーション研究会主催の障害児サマーキャンプこのゆびとまれが石田町筒城浜で開催された。朝から強い日差しがジリジリと照りつける真夏日になった当日は障害児・者7家族をはじめ総勢51人の参加があった。

今年は午後3時から午後9時までの日程で開村式と夕食・レクリエーション・キャンプファイヤーというプログラムで実施した。ふれあいセンターでの開村式では元気村安永雅村長（実行委員長）が開会挨拶のあと村民賞を子供たちに手渡しされた。アンパンマン班と食パンマン班と別れて班長中心に自己紹介と班のなかで役割分担などをした。その後ふれあいセンター前で記念撮影、そして夕食カレーとサラダづくりに挑戦した。ごはんも飯盒で炊いたが、初体験の人も多く、ましてや子どもたちは出来上がったご飯を見てびっくりしていた。

ファイヤー場横の芝生に移動してのレクリエーション＝写真＝では、子どもから大人まで楽しめるゲームを班対抗で行ったところ大変盛り上がり歓声がこだましていた。

薄暗くなり始めた午後8時、待望のキャンプファイヤーが始まった。キャンパーが入場し円になり、開式宣言のあと「遠き山に日は落ちて」の合唱のなか、トーチを持った女神が入場し営火長（村長）に点火、各班長に分火され班長の誓いの言葉のあと集火し「もえろよもえろ」の合唱のなかファイヤーは燃え上がった。鯛網音頭をおどり、花火を楽しんだ。子どもたちに今日の感想を述べてもらった。「カレーがおいしかったし飯盒のご飯は驚きだった」「ファイヤーはやはり楽しく盛り上がりました」「また、来年も参加します」などの声が聞けた。「今日の日はさようなら」を歌い閉会式をして元気村は閉村した。恒例の参加者全員と握手しながら退場で今日のお礼と再開を誓った。

25回目のキャンプも無事に楽しく終えることが出来て何よりでした。25年間にわたり続けてこられたのは、楽しみにしてくれる子どもたちと御家族と熱心なボランティアのみなさん、そして協力機関の方々あってこそだと思います。ありがとうございます。心より感謝申し上げます。

《短歌とエッセイ》市山　節子
終戦記念日に寄せて
知覧の丘（特攻平和会館）その二

知覧の道のシンボルならむ石塔と交互にならぶ
槇のさみどり

さくら樹にまもられるごとく特攻機　飛行すがたの銅像に添う

南海を向きて建ちたる母の像もの言いたげに両手組みいる

弾丸となりし命が火ばしらをあげいる映像息のみて観る

生きるのぞみ断たれし叫び裡に秘め別れの盃受けいる横顔

セーラー服ともんぺ姿の女学生　手を振り見送る出撃の機を

海底より引き揚げられたる零戦が幾多のみ霊のごとく置かるる

沖縄の海に散った特攻隊員（鹿児島県）

今から67年前の終戦の日まで特攻基地があった知覧には、特攻平和会館があります。国の為に、沢山の優秀な隊員が、沖縄の海に向けて飛び立ち犠牲になりました。

会館に入ると、国を思い、家族をおもい、恐怖と悔しさを心に秘めて散った、千三十四人の顔写真が壁面を埋めていました。

展示物の中には、戦闘帽、飛行めがね、軍刀、遺書や色紙の絶筆の文を読み胸を突かれる思いでした。「浮世より片道切符の冥土行き」「命より犬死を恐る」等・・・。遺書にさえ本音を書けない理不尽な戦いを強いられた、若人の慟哭が聴こえてくるようでした。

出撃前夜には、灯火管制の暗がりの中で「同期の桜、ふるさと、夕やけ小やけ」等を、皆で手をつないで、何度も歌っていたそうです。

彼らの犠牲があって今の平和がある事。終戦記念日が巡ってくる夏には、戦争で犠牲になった方々の事を忘れず感謝したいと思います。